

2回にわたって、『天理教教典』の後篇において「信心」は「道の子の心がけ」として、「信仰」が「道の子の歩み」として、順序立てて説かれていることについて書いているが、天理教原典における用例については触れていない。「おふでさき」には、「信心」も「信仰」もまったく使われておらず、もっぱら「道」(みち)が多用されて説かれているのであるが、つとめの地歌として人々が心に覚え込んでいる「みかぐらうた」には「信心」が、6回用いられている。

そこで今回は、前回までに書いてきた『天理教教典』における「信心」や「信仰」の読みを踏まえて原典を理解するために、「みかぐらうた」「おさしづ」の用例を概観することにしたい。

### 「みかぐらうた」の「しんべ」

「みかぐらうた」には、「しんべ」という言葉が6カ所にみられ、おてふりでは合掌の動作で表されている。そのお歌を挙げると次のとおりである。

こゝまでしんべしたけれど  
もとのかみとハしらなんだ (三下り目9)  
いつまでしんべしたととも  
やうきづくめであるほどに (五下り目5)  
どうでもしんべするならば  
かうをむすばやないかいな (五下り目10)  
なんぼしんべしたととも  
こゝろえちがひはならんぞへ (六下り目7)  
やつぱりしんべせにやならん  
こゝろえちがひはでなほしや (六下り目8)  
こゝまでしんべしてからハ  
ひとつのかうをもみにやならぬ (六下り目9)

こうして列挙すると、これら6つのお歌はいずれも、第五節の前半にあることが分かる。深谷忠政氏は、「かぐら・てをどり」の「てをどり」(「みかぐらうた」の第四、五節)について、「てをどりは、／元の理における発展の理を象徴して、即ち、親神の教に導かれて更生して行く人々のたどる成人の過程—天理教信者の成人の過程—を手振りに表して踊るものであります」(『天理教—全人類の最後に求めるもの』改訂新版、道友社、1992年、111頁)と述べている。「みかぐらうた」の第四、五節は、「教信者の成人の過程」が歌われているというのである。したがって、「信心」が第五節の前半にあらわれているということは、『天理教教典』の「後篇」において、まず「信心」が説かれる順序と符合すると理解することができる。深谷氏も「第五節も後になるにしたがって、御利益信心とも見えるものより、次第に本格的信仰のものへと移っていくように思われます」(『みかぐらうた講義』改訂新版、道友社、1980年、57頁)と、「信心」と「信仰」を使い分けており、その順序が記されている。ただし、この引用部分は「信心」の用例ではなく、第五節の主題について論じたもので、「御利益信心」が一下り目、二下り目に当てはまり、三下り目からは「本格的信仰」が鮮明になってくると論じている(前掲書、81頁)。

深谷氏は、「信心」の出てくる三下り目九つのお歌について、

「このお歌をお作り下さいました頃は、もうをびやだけの神様と  
思っている人ばかりではなかったとは思いますが、ありきたりの  
拝み祈禱の神ぐらいに思っていた人が多かったのでありま  
しょう」(前掲書、97頁)と指摘している。つまり、そこでの「信  
心」は、拝み祈禱の「御利益信心」が想定されている。

五下り目五つに関しては、前のお歌で、「心のよごれ」や「よ  
く」について説かれ、後のお歌では、「むごいこゝろをうちわ  
すれ やさしきこゝろになりてこい」とあり、心のあり方につ  
いて強調して「信心」が説かれ、十ではそうした「信心」する  
上に講を結ぶことが説かれる。

六下り目について、深谷氏は「五下り目がおたすけの章とい  
うならば、六下り目は信心の章ということが出来ましょう。／  
即ちこの下りは、或は勇み或ははずみ、或は疑い或はそれよう  
とする変りやすい人間心を見定めて、或は教え或は論し、はつ  
きりした信仰の効能を見せていただく、揺ぎなき心境にまでみ  
ちびこうとされる、親神様の親心をお歌い下されてある」(前  
掲書、150頁)と、「人間心」に対するお論しを中心であると  
記している。

そして、「七下り目はにをいがけのお歌にはじまり、田地と  
種まき」について(前掲書、151頁)、八下り目は「ふしんを  
目標とするよふぼく結集の章」(前掲書、168頁)であり、「よ  
ふぼくがいよいよふしんにとりかかるために、如何に丹精し如  
何なる道をたどるかということが、九下り目以下のお歌」(前  
掲書、183頁)であると言われている。

このように、「信心」はすべて第五節の前半に出てくるが、  
それはおもに「信心」する者、すなわち「道の子の心がけ」に  
ついての論しであり、後半には、にをいがけ、ふしん、あるい  
はひのきしんといった「よふぼく」の、いわゆる「道の子の歩み」  
について説かれていると理解することが出来るだろう。

### 「おさしづ」の「信心・信仰」と「道」

「おさしづ」については、これから読み進めていくのであるが、  
簡単に触れておきたい。『おさしづ索引』(第2巻、教義及史料  
集成部、1985年)によれば、「おさしづ」には、「信心」とい  
う言葉は42回みられ、年代は明治21～40年とほぼ「おさしづ」  
の全体にわたっている。一方、「信仰」という言葉は、「信心信仰」  
という形で、明治28年に一度出てくるのみである。

中山正善「天理教教義における言語的展開の諸形態」(『みち  
のとも』昭和35年11月号)には、「明治十八、十九年(一八八五、  
一八八六年)の頃から所謂おさしづとして、現実的な種々の心  
構えを教示されることとなつた」(10頁)と、「心構え」とい  
う言葉が使われているが、それと「道の子の心がけ」としての「信  
心」という言葉が多用されていることとはつながっているよう  
に思われる。

それに対して、『おさしづ索引』(第3巻)によれば、多少の  
重複や脱落もあるかもしれないが、「おさしづ」には「道」と  
いう言葉が7,698回みられる。これからは、この「現実的な種々  
の心構えを教示」された「おさしづ」における「道」を取りあ  
げて、読み進めたい。